－役員エッセイ－

大通公園を望む窓辺から

日本人の寿命から思うこと

常任理事　目黒　順一

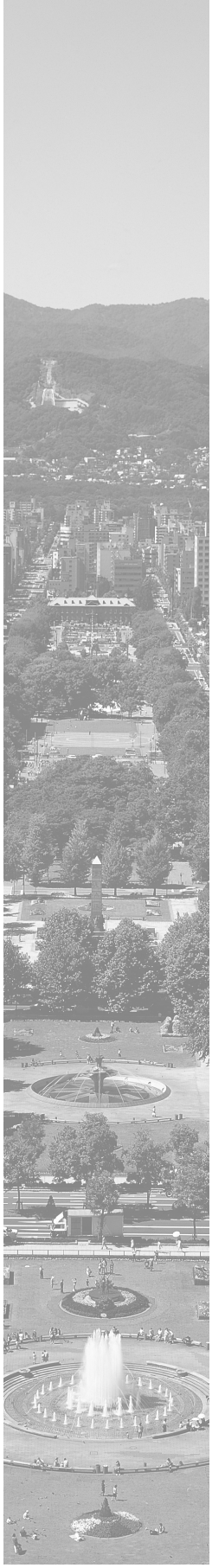
わが国民の2013年の平均寿命が男女ともに過去最高を更新したそうである。女性は86.61歳で前年に続き世界一、男性は初めて80歳を超えて80.21歳となり、世界第４位とのこと。長寿はめでたいことであり、喜ばしいと言える。私が卒業した昭和49年頃は女性が76～77歳、男性が71～72歳くらいであった。そのころの外科手術適応は70歳以下、せいぜい75歳以下と教えられたものである。ところが現在は患者さんがお元気であればまさに青天井で、個人の状態によっては100歳以上でも適応となる。当院でも、手術患者さんの年齢は80歳代がめじろ押しの状況であり、外科はまるで老人病棟のようである。併存合併症も多く周術期の管理も大変となった。

昭和16年に発表された童謡に「船頭さん」という唄がある。

♪　村の渡しの　船頭さんは　今年六十のおじいさん　年はとっても　お船をこぐ時は　元気一ぱい　ろがしなる　ソレ　ギッチラ　ギッチラ　ギッチラコ　♪

今なら60歳は前期高齢者にも入れてもらえない。当時の平均寿命は男女ともに50歳代であり、作詞者の武内俊子は39歳で、作曲者の河村光陽は49歳で没している。隔世の感がある。

少子高齢社会の到来で、社会構造が激変しつつある。何かと費用のかかる高齢者が増えて、国家財政も今のままでは厳しい。子孫に希望の持てる社会を残すために、考え方を変える必要がある。先日、岡田武史元サッカー全日本代表監督のトークショーを聞いた。自身の不明を恥じるが、彼が環境や自然保護について長く活動しているのを知らなかった。彼は「アメリカの先住民には、この大地は子孫からの預かりものという認識がある」と話された。莫大な借金や何かに汚染された地域を残さないために、すでに前期高齢者の一部に加わった自分ができることを、今一度真剣に模索したい。



人口減少に伴う小児科医療の行方

理事　津田　哲哉

小生は昭和22年生まれ、小児科になって42年目となりました。いわゆる団塊の世代です。子どもが多く喧騒の中で育ち、いろいろな意味で競争が強いられた時代でした。しかし最近、人口減少と高齢化が国の大きな問題となり、老人の長生きは何となく国の蓄財を費やす悪者のようで肩身の狭い思いがします。

昨年12月、北海道医師会医政講演会で国際医療福祉大学　高橋　泰先生の「人口減少社会に向かう日本の医療福祉の現状と将来予測－特に北海道に焦点を当てて－」を聴講しました。人口減少は地方の町ほど社会基盤を弱体化し住民の生活に大きな影響を及ぼすそうです。これからは医療のみならず、町造りをどうするか大きく問われた講演でありました。その中で人口減少に伴う疾病の変化と同時に医療体制の変化が押し寄せてくることも知りました。

小樽市は北海道人口10万人以上の都市の中で最も人口減少が進み、高齢化率35％と最も高い都市です。当然、老人の医療問題の取り組みは市も医師会も喫緊の課題であります。一方、出生数は年間600人台で、このままのペースで減少すると年間200人以下になってしまうとの予想もありました。

現在、小児科医療機関は、市立小樽病院・協会病院と、小児科外来のみ病院２軒、診療所２軒です。診療所２軒とも高齢で60歳代・70歳代であり現状厳しいものがあります。開業医を密かに募ってみましたが「先の無い都市には行かない」とつれない返事でありました。

高齢化都市は若年層の流出も激しく、このままでは子どもを支える小児科医も立ち寄らない将来を見捨てられた情けない町になってしまいます。ローカルな町の人口減少は、周産期、小児医療の維持困難を果し、若者の流出増加、高齢化、人口減少の進行と悪循環となっていきます。人口減少は、老人問題だけではありません。経済・医療・教育などの町おこしの問題です。

誰か当地で小児科医を開業する方はいらっしゃいませんか。